

発表タイトル	近世日本養生論における音楽療法思想の特徴 —竹中通庵『古今養性録』及び貝原益軒『養生訓』を中心に—
発表者所属名	国際日本研究専攻
発表者氏名	光平 有希

人間は太古より治療や健康促進・維持する手段として音楽を用い、今日も東西で音楽療養は発展し続けている。しかしその歴史を辿り、思想を解明する研究は国内外で盛んになされておらず、音楽療法史に関する基本的文献も散見されるに留まっている。日本でも古くから伝統文化土壌に根付いた音楽療法論が存在し、その中でも、近世からは養生論という医学体系下で、音楽療法がまとまって言及されるようになった。その日本音楽療法思想は、西洋音楽療法思想が流入してきた近代に大きな転換期を迎え、近世日本の独特な音楽療法思想を残しながらも次第に変化していく。本発表では、近世養生論における音楽療法思想に着目し、とりわけ竹中通庵『古今養性録』と貝原益軒『養生訓』に焦点を当てながら、そこにみられる古代中国との関連について紹介したい。

〔近世養生論における音楽療法思想の変遷〕

近世養生論における音楽療法思想は、大きく 3 つに区分される。まず、近世初期の竹中通庵『古今養性録』では、中国最古の医学書である『黄帝内経』を受容する中で音楽療法へのまなざし見られ、これは日本養生論における音楽療法思想の萌芽期にあたる。次いで儒学、その中でも古医方の影響を受けている貝原益軒『養生論』・芝田祐祥『人養問答』の音楽療法思想では江戸中期に独自の観点からの儒学的展開が見られる。江戸後期には、国学者である鈴木朗が『養生要論』で、蘭学にも影響を受けた音楽療法思想を展開する。

〔竹中通庵『古今養性録』〕

竹中通庵は李朱派の代表的人物である曲直瀬玄朔の孫弟子であり、古代中国最古の医学書『黄帝内経』を広く講じた人物である。『古今養性録』は、彼が『黄帝内経用語集註』を執筆する際に、『黄帝内経』で述べられている「養生」に関する内容を書きとめていたことを起点に、その他の中国医学書にみられる「養生」の内容も加えることにより完成した。その『古今養性録』では、『黄帝内経』で診断として重視される「五音」を用いた音楽療法へのまなざしがうかがえる。

〔貝原益軒『養生訓』〕

儒学者・儒医であった益軒は、多くの教訓書を残す一方で音楽に対する造詣も深かった。当時、儒学は幕府の官学であり、その中心になる礼楽の論議も盛んであったが、その中で益軒は「礼」のみならず「楽」にも目を向け、音楽を実践し、そこに療法的価値を見出した。彼の音楽療法思想は『礼記』「楽記篇」を中心とした古代中国の礼楽思想に基づいているものの、自らの体験を基に、詠歌舞踊は精神の安定をもたらすほか、「気血」を促し「元氣」に作用する効能があるとして、独自の音楽療法思想を展開する。また、興味深いことに彼の音楽療法思想は同時代イギリスで展開された音楽療法思想にも酷似している。